

[研究論文]

高等学校の音楽 I におけるウクレレ指導についての一考察 —授業実践と事前事後アンケート調査を基に教育楽器としての可能性を探る—

A Study of Ukulele Instruction in High School's "Music I" —Exploring the Possibility of the Educational Use of an Instrument Based on the Teaching Practice and Pre/Post Questionnaires—

佐藤雄紀

Yuki Sato

〈抄 録〉

本研究は、高等学校の音楽 I におけるウクレレ指導の可能性を、授業実践と事前事後アンケート調査を基に検討したものである。生徒はウクレレを難しいと感じたり、挫折を経験したりしたが、最終的には9割を超える生徒が、楽しかった、音色が好きだ、他の曲にも挑戦してみたいと回答した。実践と調査を用いて、多角的にウクレレの持つ可能性を探った。

キーワード：ウクレレ、高等学校、音楽 I、楽器、アンケート、学習指導要領

Abstract

In this research the possibility of using ukulele instruction in the high school course "Music I" was considered based on teaching practice and pre/post questionnaires.

Although students felt that an ukulele was difficult and encountered setbacks, over 90 percent of the students responded that they enjoyed the experience, liked the sound, and wanted to try other pieces. Using practical and investigative methods, I searched for diverse possibilities for holding the instrument.

Keywords: Ukulele, High school, Music I, Musical instrument, Questionnaire, Curriculum Guidelines

I はじめに

本稿は、高等学校の音楽 I におけるウクレレ指導の可能性を、授業実践と事前事後アンケート調査を基に検討したものである。なぜ音楽 I で多く扱われるギターではなく、ウクレレなのか。ギターは3コードの一つであるFのコードがとても難しい。人差し指で6弦全てを押さえながら、中指、薬指、小指で異なる弦を押さえなければならないのだ。手の小さい生徒には大変困難で、手の型によっては

不可能なポジションでさえある。ギターを辞めてしまう大きな原因の一つがこのFのコードだという。頻繁に出てくるコードで、この難しさは何とかならないものかとずっと考えていた¹⁾。

筆者がウクレレに注目したきっかけは、保育者養成校の学生との関わりであった。ピアノを弾くことへの苦手意識から、音楽そのものに対してマイナスのイメージを抱いてしまい、苦悩している学生は多い。幼稚園教諭・保育士になりたいという素晴らしい志があるのに、そのことが心のハードルになってしまうのはもったいない。何か一つでも楽器を弾けるようになれば、自信が持て、音楽に対して前向きな気持ちになれるのではないか。まずは、ピアノが不得手な学生の代替の楽器として、最適と考えたのである。

このようなウクレレとの出会いであったが、研究を進めていくうちに、この楽器こそ高等学校の限られた器楽の時間の中で、いくつかの曲を修得することができ、生徒の今後の人生を豊かにする魅力的な楽器であると確信した。生徒が皆ピアノを弾けるわけではない。リコーダーだけでなく、何か楽器を弾けるようになれば、音楽をより身近に感じ、授業で得る充実感や楽しみが増すことだろう。ウクレレはギター（6弦）に比べて、弦の本数が少ない（4弦）ため、ネックの幅がかなり細い（1フレット付近で35mm程度）。そのため、手の小さな生徒でも弦を押さえやすい。また、生徒はウクレレのような弦楽器に一種の憧れを抱いている。ウクレレは弾き語りだけでなく、ソロ演奏、アンサンブル、エレキウクレレ、他楽器とのアンサンブルなど楽器としての多くの可能性があり、継続して学んでいくのにも大変魅力的な楽器だ。

ビートルズのジョージ・ハリスンはこう述べている²⁾。「ウクレレを弾く人、またはウクレレに関わる人達の中で、ハッピーでない人は見たことが無い！」また、サザンオールスターズの関口和之はこう述べている²⁾。「簡単に誰でも弾けるようになれる楽器ですが、ハーブ・オータやジェイク・シマブクロのようにリズムと美しい編曲によって人々を感動させることもできます。漫談からクラシックまでこの楽器を利用できる範囲は広く、様々なウクレレプレイヤーが存在し、きっとこれからも出てくることでしょう。ウクレレ自体の歴史はまだ浅いので、演奏法や構造など、まだまだいろいろな可能性を秘めている未来の楽器なのです」

Ⅱ 先行事例

ウクレレに関する先行事例をいくつか、取り上げてみたい。飯塚（2012）の2年9ヶ月の実践報告の要旨は、次のようなものである³⁾。「1. 少人数で歌を楽しむ場合から、100名以上の子どもたちの歌唱まで対応でき、伴奏楽器としてピアノ同様に活用できる、2. 保育室内の他のあそびの空間を侵さずに歌を楽しめる、3. ウクレレの音色から子どもの声が優しくなる、4. 子どもに向き合って、様子を見ながら伴奏できる」

また、志民・中村（2010）はウクレレの伴奏楽器としての可能性について、「ウクレレはピアノよりも音が小さく、子どもと向かい合いながら歌うことができる点で、指導において好都合な面が多い。実際ウクレレによる伴奏を開始して以降、子どもの声質が変化してきたように感じられた」と述べている⁴⁾。ウクレレを用いて、自然な歌唱を引き出すというのは筆者のねらいの一つでもあるから、二つの先行事例は非常に興味深い。実際に、生徒に対して行った事後アンケートでも、ウクレレで弾き語りをするにより自然に口ずさめたという項目で、YES 77% NO 23%という結果が出ている。

また、日本のウクレレメーカー KIWAYAがスポンサーとなり、ウクレレインストラクターの高木（2015）が、東京都台東区立松葉小学校で、3年生の希望者は月曜日の6校時に、4年生以上の希望者は土曜公開日の4校時に、ウクレレを定期的に指導している⁵⁾。児童は楽しく弾いており、レッスン

中は笑顔が絶えないということだ。基本的な3コードを教え、3学期には、ウクレレ発表会で「カエルのうた」「森のくまさん」などを演奏した事例がある。「なかなか大きな声で歌うまでにはいたりませんでした。私も一緒に歌い、見ている生徒さんたちにも協力を促し盛り上げていただくことで、それがひとつのパフォーマンスともなり、とても暖かい空気になりました」と述べている⁶⁾。この高木(2015)の事例からもわかる通り、ウクレレは音楽経験の浅い小学生にとっても、演奏発表まで持つて行くことができる楽器であり、音楽教育活動としてとても良い効果をあげている。私が授業実践する高校生と年代は異なるが、このことから音楽が苦手な学生にとっても、演奏できるようになる可能性が高い楽器であるということがわかる。

またカナダでは1960年～70年代以降、ウクレレが学校教育の音楽の授業で使われるようになっていた。ジョン・チャルマーズ・ドーンは、ハリファックス教育委員会(1967年から1984年)の音楽主査の任期中に、子どもと大人のための安価で実用的なウクレレを教育楽器として用い、学校の音楽教育を大きく変革した。カナダ出身の世界的なウクレレ奏者であるジェームズ・ヒルもドーンの指導の下で育った。ヒルは演奏活動だけにとどまらず、ジェームズ・ヒルウクレレイニシアティブ(JHUI)という教師認定プログラムを作り、国際的にウクレレ教師を育て、指導のレベルを高め、より豊かな音楽教育を促進するために積極的に活動している。このJHUIを受講したイブは「私は教育楽器としてのウクレレの可能性を実際に体験しました。教育のためのより多くの技術を得る素晴らしい方法があります」と述べている⁷⁾。

ドーンウクレレプログラムで学び、ドーンと30年以上にわたって師弟関係があり、良き友人でもある優れた音楽教育者ジェイミー・トーマスは、次のように述べている⁸⁾。「各クラス、年間を通じて、週に2度、45分の授業があると理想的です。授業時間数が減ると、生徒が修得できることも減ってしまいますし、一部の教員は弾き語りを教えます。弾き語りはいくつかの素晴らしい結果をもたらしますが、ウクレレプログラムの持つ音楽理論や読譜能力の構築の可能性は少なくなってしまう」「私達のウクレレプログラムは小学校の音楽教育の優れた形であると信じています。容易ではないですが、とても価値があります。我が校の学生は、音楽を作ることの喜びに溢れています。彼らはウクレレを通じて、歌、音楽理論、和音を学び、耳でよく音を聴いて、音楽を読み解き、これらの技術を身につけるために懸命に取り組みます。是非お楽しみ下さい！」このドーンウクレレプログラムは、児童、生徒が音楽的に発達していけるよう緻密に構成されており、ウクレレの時間は弾き語りだけにとどまらない。下図⁹⁾にあるように、歌、単音でのスケール、コード、スコアリーディング、耳の訓練、ソロ、音楽理論など45分の授業時間を細分化し、指導している。なお、図2はハ長調の単音のスケールであるが、カナダではこの通常のチューニング(C6)を使用したスケールに加えて、ニ長調のチューニング(D6)も使用されている。

これらを見ただけでも、バランス良く、総合的な音楽力が身につくプログラムであると感心させられる。ただ、指導した高校のカリキュラムでは、年間を通じてウクレレに取り組むことは難しく、週一コマ八回しか時間が取れなかったため、まずはウクレレに親しんでもらいたいという理由から、今回は弾き語りの指導に限定した。ウクレレはこれからの日本の音楽教育現場で、児童、生徒の音楽力を伸ばす楽器として大いに研究の余地がある。特に、現在日本の教育現場で利用されているリコーダーと違って、歌を伴って学べることのアドバンテージは大きい。

文部科学省(2010)の掲げる音楽Iの目標は次のようなものである¹⁰⁾。「音楽の幅広い活動を通して、生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てるとともに、感性を高め、創造的な表現と鑑賞の能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深める」ウクレレを演奏できるようになれば、音楽をより身近に感じ、

Ukulele in the Classroom

James Hill & J. Chalmers Doane

Lesson Plan (45 minutes)

Date:

Lesson Focus:

Warm-up (5 minutes):

Include singing, picking, and strumming.

Skills and Technique (choose five):

Skill	Duration	Notes	✓
Singing	5 min.		
Scales	5 min.		
Strumming / Chording	5 min.		
Note Reading	5 min.		
Ear Training (melodic & harmonic)	5 min.		
Solo Skills	5 min.		
Music Theory	5 min.		

Repertoire:

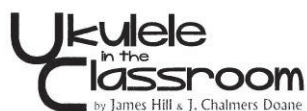
Title	Duration	Notes	✓
	10 – 15 min.		

Next lesson we'll work on the following skills and techniques (those omitted in this lesson):

Next lesson we'll work on the following repertoire:

For additional resources and more information please visit www.ukuleleintheclassroom.com.

図1 授業レッスンプラン⁹⁾



Notes on the ukulele fretboard
C6 tuning (g, c, e, a)

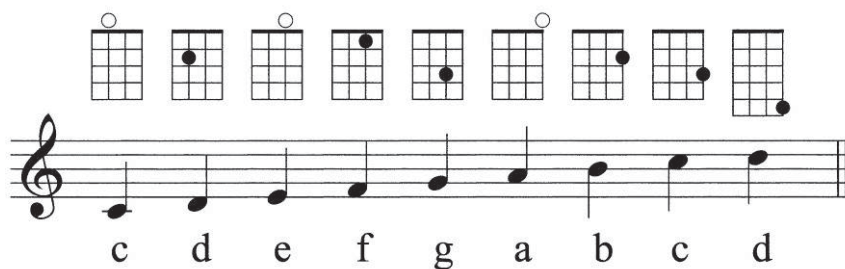


図2 ウクレレフレットボード⁹⁾

生涯にわたり音楽を愛好する心情を育てることができるのではないだろうか。学習指導要領の表現の項目は、歌唱、器楽、創作の三つが軸になっているのだが、ウクレレの基本は弾き語りであるがゆえ、歌唱、器楽の分野を跨いで学ぶことができる。また、歌唱と伴奏を一人で同時にこなすバランス感覚

も学ぶことができる。生徒は今回の授業で、3曲の弾き語り曲を修得することができた。

Ⅲ 授業実践

1 授業対象

1) 対象

東京都の私立高等学校、音楽 I 選択の1年生110名（1クラスは約20名～30名）

音楽が好きな一般的な高校1年生が対象である。

2) 授業時間

週に一回二コマ（一コマの授業時間は50分）続きで音楽 I の授業がある。その中で八回、ウクレレ指導を行った。なお、この八回の授業時間の全てをウクレレ指導に充てたわけではない。歌唱や打楽器アンサンブル、楽典、ソルフェージュの指導と並行しながら進めた。一回当たりウクレレ指導の時間はおよそ50～60分である。

3) 生徒の実態（事前事後アンケート結果より）

- ・音楽が好きだ YES 100% NO 0%
- ・クラシック音楽が好きだ YES 70% NO 30%
- ・J-POPやロック、洋楽が好きだ YES 98% NO 2%
- ・合唱や声楽、楽器（ピアノや吹奏楽など）をやっていた経験がある（1年以上）
YES 74% NO 26%
- ・どの程度、楽譜が読めますか。最も近いものに丸をつけて下さい。

あまり困らない50%・やや時間がかかる30%・かなり苦手20%

4) 取り上げた弾き歌い曲

1. ハッピーバースデートゥーユー
2. ふるさと（高野辰之作詞・岡野貞一作曲）
3. 空も飛べるはず（草野正宗作詞・作曲）

2 授業実践の実際

1) 第一回の授業

第一回の授業では、ウクレレを好きになってもらうことを第一に考え、授業を行った。まずは、一通り好きに楽器で遊ばせた後、チューニングに入った。チューニングとは、音の高さをよく聴いて認識し、正しい音の高さに調整していく作業である。教室にあるピアノや電子ピアノ、キーボードの他、専用のチューナーを使ってチューニングを行わせた。チューニング自体、一部の吹奏楽部の生徒を除けば、大変新鮮な経験だったようで、苦勞しながらも、友人と協力しながら楽しそうにチューニングしている姿が印象的であった。筆者も苦心している生徒はいないか、声をかけながら巡回し、アドバイスをした。

ウクレレの初心者は、まず右手の親指を用いて開放弦で練習する。ポイントは親指をしっかりとよく伸ばして、次の弦に持ちかかるように演奏することである。4弦全てを弾いていなかったり、強く弾きすぎたりして、金属音のような音が鳴っていることに気付かない生徒もいたので、前で奏法によ

る音色の違いを示してあげたり、巡回した時に一人ひとりの音をよく聴いてあげたりし、生徒自身に違いを気付かせるよう心掛けた。生徒もよく響いている時と金属音の違いを感じているようだった。

次にCのコードを弾かせた。ポイントは、しっかり指を立てて弦を押さえること、フレットの近くを押さえること、他の弦に押さえている指が触れないことなどである。この違いを前で示し、生徒にも演奏させた。初めて鳴らしたウクレレのコードに喜びを溢れさせていた。

次にFのコードを弾かせた。Fのコードは下図¹¹⁾のように演奏するのだが、Cに比べ多くの弦を跨ぐため、指が意図しない弦に触れてしまいやすい。前で見本を示して注意を促し、C、Fの2つのコードとも伸びやかな音が出るように指導した。また、C→Fのコードチェンジの練習も繰り返し行った。Cを弾いている時にFのポジションを意識しながら、早めに移動してというように。図3から見ても、基本であるC、Fのコードが、ウクレレの方がいかに容易かわかる。

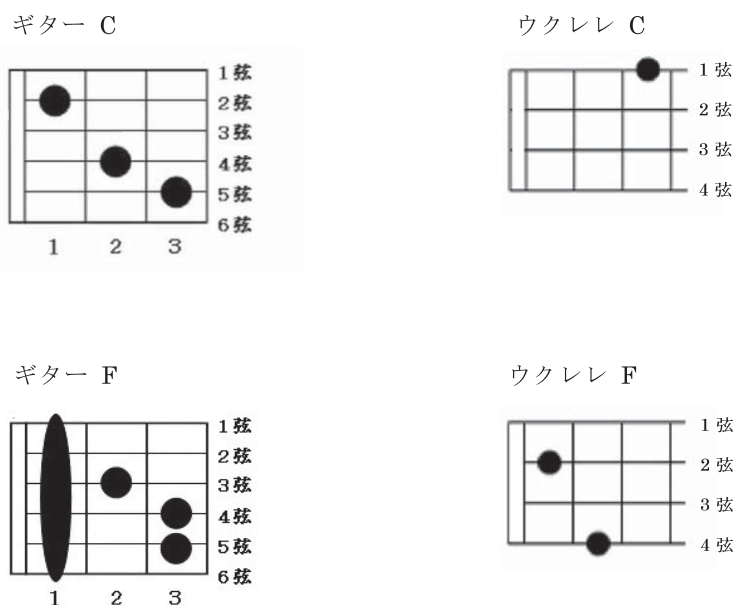


図3 ダイアグラムで見る押さえるポジションの比較 野口・佐藤 (2013)¹¹⁾

2) 第二回の授業

今回は前回習ったC、FのコードにG₇を加えた基本の3コード、比較的容易なポジションのAmも加えて4つのコード修得を目標とした。C、Fをしっかり復習して、新しいAm、G₇のポジションを確認した。生徒が特に苦勞していたのはG₇である。人差し指、中指、薬指で押さえるのだが、これがなかなか難しい。ウクレレ最初の難関とも言えるだろう (図4)。



図4 ウクレレのコード Am と G₇

3本の指を立てて押さえ、跨いでいる弦に触れないように、と良い手本と悪い手本を示した後、巡

回しながら一人ひとりの指導をした。押さえている指が意図しない隣の弦に触れてしまい、弦がよく鳴っていない生徒が多く見られた。視覚的にも弦がきちんと振動しているか確認することや、順に音ずつ鳴らしていき、それぞれの音がよく鳴っているかを確認するように、と注意を促すとその違いに気付く生徒も多く出てきた。理解はしているが、ポジションに苦勞して上手く鳴っていない生徒もいた。皆が音に注意を向け、耳を澄まし、一生懸命に練習している姿が印象的であった。新しいコードの修得、適度な難易度が嬉しかったのだろう。

その後はコードチェンジの練習を行った。一つ一つのコードを弾けるのはもちろん大事だが、弾き語りの時など、チェンジがスムーズにできることが非常に重要だ。移動のしやすさや和声の美しさから、C→Am→F→G₇→Cの順番で練習した。まずは2つずつC→Am、次にAm→F、次にC→Am→Fというように少しずつ積み上げて指導した。予想できていたことだが、F→G₇のコードチェンジは最も苦勞していた。人差し指をコンパスの針のように軸にしなが、中指と薬指を持ってくると実際に前で手本を示してあげると理解が進んだ生徒もいた。ポジションの移動でとても大事なことは、前のポジションを生かしなが、次のポジションへいくということである。上手く移動できない生徒の多くは、前のポジションを全てゼロにしてしまっ、一から次のポジションを探していることが多い。ウクレレを演奏する生徒にもその傾向が多く見られたので、前のポジションからどのように移るかということに焦点を当てなが、指導した。

3) 第三回の授業

前回の4つのコードチェンジをしっかりと復習させた後、これまで習った3コード(C、F、G₇)のみで演奏できる、「ハッピーバースデートゥーユー」の練習に入った。この曲を選択した理由は、基本的な3コードで演奏できること、誕生日会などちょっとした時に簡単に弾けること、コードチェンジに時間的な余裕があるため、導入に最適と考えたからである。誕生日の近い生徒を皆でお祝いし、盛り上がった。弾き語りには自分で伴奏をしながら歌うという、ソルフェージュ的に高度な内容なのだが、生徒はしっかりと楽しみながこなしていた。下記は、実際に授業で使用したプリントである。

ハッピーバースデートゥーユー
C G₇
ハッピーバースデートゥーユー
G₇ C
ハッピーバースデーディア ()
C F
ハッピーバースデートゥーユー
G₇ C

4) 第四回の授業

前回までに修得した4つのコードチェンジと、「ハッピーバースデートゥーユー」の復習をした。そして今回は、今まで習ったコードを使って、「ふるさと」に適切なコードを入れてみようという課題を出した。生徒は4つのコードC、Am、F、G₇を用い、適切なコードを見つけようと努力していた。できていない生徒、全くわからないという生徒もいたが、巡回しながらヒントを与えたり、一緒に口ずさんだりしながら、なるべく自分で考えられるよう促した。最後に皆で答え合わせをし、コードを記入させてから練習に入った。授業が終わる頃には、自信を持って弾き語りしている生徒が多く見ら

れた。

◆自分で入れてみよう♪「ふるさと」

うさぎ おいし かのやま
() () ()
こぶな つりし かのかわ
() () () ()
ゆめは いまも めぐりて
() () () ()
わすれ がたき ふるさと
() () () ()

5) 第五回の授業

まず、4つのコードの音色を再確認させた。慣れも出てくるので、折を見て確認することは大事である。音色の確認の後、スピッツの「空も飛べるはず」の練習に入った。

この曲をあまり知らない生徒もいたので、持参したCDを鑑賞し、その後ピアノを使用して歌唱の練習もした。ウクレレの練習は、サビの部分から行った。この部分はEm₇、G以外は今まで習ったコードで演奏が可能で、Aメロ、Bメロの部分より、比較的容易であるからだ。新しく出てきたEm₇はG₇の人差し指を抜いただけのポジションなので、その点を意識させて指導した。G₇→Em₇の繰り返し練習。GはG₇と同じく3つ音を同時に押さえるのでとても難しい。この曲のサビではCからGの移動のみなので、Cを弾き終える頃にGで使用する人差し指、中指で弦を挟み、薬指をスライドさせるように動かすという移動のポイントを手本として見せ、苦勞している生徒がいないか、確認しながら巡回した。生徒の多くがサビの部分の雰囲気をつかむことができたように思う。

幼い微熱を下げられないまま 神様の影を恐れて
C Dm G Am F C D₇ G₇
隠したナイフが似合わない僕を おどけた歌でなくさめた
C Dm G Am F C D₇ G₇
色褪せながら ひび割れながら 輝くすべを求めて
Am F_{Δ7} Dm₇ Cadd₉ F_{Δ7} G₇
君と出会った奇跡が この胸にあふれてる
C G Am F G₇ C
きっと今は自由に空も飛べるはず
F G₇ Em₇ Am D₇ G₇
夢を濡らした涙が 海原へ流れたら
C G Am F G₇ C
ずっとそばで笑って いてほしい
F G₇ Em₇ Am F G₇ C

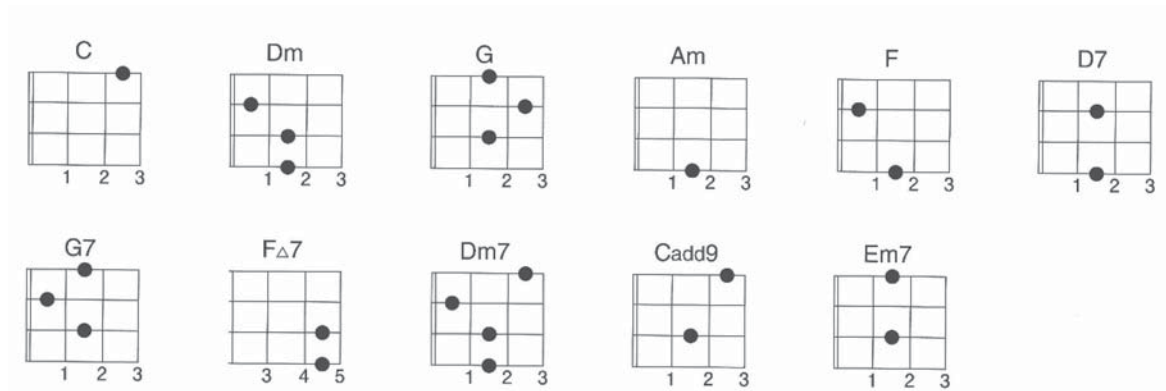


図5 使用コード 勝 (2012)¹²⁾

6) 第六回の授業

サビの部分で復習し、AメロBメロの部分で指導した。図5¹²⁾のようにこの部分には今まで出てこなかった、様々なコードが出てくる。しかし、生徒は新しいコードの響きに目を輝かせていた。難しいコードを取り上げ、指導。特に生徒が苦勞をしていたのはBメロの部分(色褪せながら～)のコードチェンジであった。苦勞しながらも、少しできてきた生徒もいたので、ゆっくりと通してみた。何とか最後まで弾けたというできではあったが、生徒の顔は充実しており、大曲ができ上がりつつある喜びが溢れていた。

7) 第七回の授業

この時間は次回のウクレレの個別テスト(「ふるさと」、「空も飛べるはず」)に向けて、質問と練習の時間に充てた。苦勞している生徒もいたので、丁寧に見て回った。得意な生徒が教えてあげている姿もあり、大変嬉しく思った。テストに向け、隔列ごとに演奏して、お互いに聴き合ったり、CDの演奏に合わせて練習をしたりした。休憩時間にも練習する熱心な生徒が多かった。

8) 第八回の授業

ウクレレ指導の最後の時間は、今まで学んできた成果を確認するため、別室に2人ずつ呼んで演奏を聴いた。普段は大きな教室で一斉に弾いているため、どうしても生徒同士の音が混ざり合ってしまう。別室で演奏させたのは、練習の成果を見る試験という目的もあったが、それよりも、生徒自身に、耳を澄ませて、自分の音をよく聴いて欲しかったからである。

良い音を出すためには、親指のはじき方、しっかりと指を立ててフレットの近くを押さえられているか、指が意図しない弦に触れていないか、早めのポジション移動などいくつかのポイントがある。音がよく聴こえる環境で、演奏できたことは生徒にとっても良かったようだ。弾き方による音色の違いを感じ、よく音が聴こえる環境を「とても気持ちが良いですね」と喜んでいた。これこそ音楽を楽しむ、音を味わう、感性を磨くということではないだろうか。

IV 授業実践のまとめ

1 良かった点

1) 生徒の様子

- ・音色を聴いて感動する生徒が多かった。

- ・自分から率先して練習する生徒が多く見られた。
- ・新しい曲やコードを知りたいなど、積極的な姿勢が多く見られた。
- ・練習をしながら自然と歌声が出ていた。
- ・自然に身体を揺らしながら歌う姿が見受けられた。音楽を身体全体で感じていた。
- ・照れながらも笑顔で歌うことができた生徒が多かった。
- ・生徒にとってチューニングは、新鮮な経験だったようで、苦勞しながらも音を合わせようと楽しんでた。
- ・音楽の得意な生徒が、チューニングやコードチェンジの際に、苦勞している生徒にアドバイスしてあげている姿が非常に印象的であった。助け合いながら、皆で上達していくという音楽の授業の醍醐味を感じられた。
- ・生徒は弾き方によって音色の違いが出ることを体感していた。
- ・耳を澄まして音を聴くという習慣ができた。
- ・ウクレレを弾けるようになったことで、音楽を身近に感じた生徒が多かった。
- ・他の楽器へ挑戦したいという気持ちが湧いた生徒もいた。
- ・全く弾けなかったという生徒は一人もいなかった。

2) 指導者の感想

- ・初めてウクレレを手にした時の生徒の顔つきは忘れることができない。
新しい楽器に出会った喜びに溢れていた。どのクラスも雰囲気非常に明るくなった。
- ・最終的に一人ひとりの演奏を聴けたことで、教員も適切なアドバイスができたし、生徒も音への感度を高め、改善点を認識できていた。
- ・ウクレレの維持費はほぼかからない。弦が切れたりすることもなかった。
- ・筆者の学校では30台のウクレレを保有していたが、楽器棚の下部分だけで収納することができた。ウクレレの収納に関しては、広くない音楽準備室でも十分保有することが可能だろう。

2 今後の課題

1) 指導方法

- ・各練習に入る前に、教員が前で良い手本、悪い手本を見せることで、生徒はその違いを認識し、理解度、集中力が増した。

2) チューニング

- ・チューニング前に大幅に音が狂っていると、チューナーが違う弦と認識してしまうため、手間取っている生徒もいた。
- ・チューナーは10台保有していたが、生徒の人数によってはもう少し台数を増やしてもよいかもしれない。吹奏楽部の一部の生徒はチューナーを持っていたので、持参してくれた。

3) 弾き方

- ・右手の親指で4弦全てを弾いていなかったり、強く弾きすぎたりして、金属音のような音が鳴っている生徒がいた。
- ・押さえている指が意図しない隣の弦に触れてしまい、よく弦が鳴っていない生徒が多かった。

4) 練習環境について

- ・20～30名で一斉に練習をするため、どうしても生徒同士の音が混ざり合ってしまう。音量を落として耳を澄まして練習する、別室で個別にアドバイスを実施するなどの対応が必要である。

5) 楽器の品質

- ・弦を押さえる指が痛いという生徒が何人かいた。強く押さえ過ぎたことが原因の一つであると考えられるが、あまりに安価な楽器では押さえる指に痛みを伴うことがある。筆者の学校は定価12000円の中程度の楽器を保有していたが、学校教育用には十分な良い音色を備えていた。よりよいウクレレを1台保有しているのだが、音色も明るく、しっかり押さえてもあまり痛くない。この辺りは、学校の予算、受講者の人数等により、各学校に合った対応が必要である。

6) ウクレレの可能性

- ・今回はウクレレの弾き語りのみにスポットを当てたが、ウクレレのソロ演奏、ウクレレのアンサンブル、エレキウクレレ、他楽器とのアンサンブルなど、まだまだ授業実践、楽器開発の余地がある。

V 事前事後アンケートの結果

ウクレレの授業を行うにあたって、事前事後にアンケート調査を行った。また事後アンケートの最後に自由記述欄を作り、感じたことを書いてもらった。

対象

東京都の私立高等学校、音楽 I 選択の1年生110名回答（1クラスは約20名～30名）。

1 アンケートから見えるウクレレの可能性

1) ウクレレに関する意識（事前アンケート）

- | | | | | |
|--------------|-----|-----|----|-----|
| ・ウクレレに興味があった | YES | 85% | NO | 15% |
| ・ウクレレは難しそう | YES | 88% | NO | 12% |

2) ウクレレと、小・中学校で学んだリコーダーとの比較（事後アンケート）

- | | | | | |
|-----------------|-----|-----|----|-----|
| ・リコーダーに比べて楽しかった | YES | 90% | NO | 10% |
| ・リコーダーに比べて易しかった | YES | 31% | NO | 69% |

3) ウクレレの授業を終えて感じたこと（事後アンケート）

- | | | | | |
|------------------------|-----|-----|----|-----|
| ・ウクレレは楽しかった | YES | 96% | NO | 4% |
| ・ウクレレをまたやりたい、もっと弾いてみたい | YES | 92% | NO | 8% |
| ・ウクレレの他の曲にも挑戦してみたい | YES | 92% | NO | 8% |
| ・ウクレレで弾き語りができるようになりたい | YES | 81% | NO | 19% |

・ウクレレを買って家でもやってみたい	YES	58%	NO	42%
・ウクレレの音色が好きだ	YES	91%	NO	9%
・ウクレレの演奏は難しかった	YES	64%	NO	32%
・ウクレレで挫折することはなかった	YES	75%	NO	25%
・ウクレレを他の学校の高校生にもやらせてあげたい	YES	93%	NO	7%

4) ウクレレに似た特徴を持つ、ギター、ベースについて（事前アンケート）

・ギター、ベースなどに興味がある	YES	58%	NO	42%
・ギター、ベースが弾ける	YES	16%	NO	84%
・ギター（またはベース）は自分には難しかった（ギター、ベースの経験者のみ回答）	YES	71%	NO	29%

5) ギター、ベース経験者のウクレレとの比較

（事後アンケート、ギター、ベースの経験者のみ回答）

・ギター、ベースに比べて楽器を習う初心者におすすめできる	YES	80%	NO	20%
・ギター、ベースに比べて演奏が容易であった	YES	96%	NO	4%
・ギター、ベースは挫折した、または挫折しそうだ	YES	40%	NO	60%
・ウクレレなら大丈夫そうだ（上の質問でYesを選んだ人のみ回答）	YES	100%	NO	0%

6) ウクレレを学んだことで変化したこと（事後アンケート）

・ウクレレで弾き語りをすることにより自然に口ずさめた	YES	77%	NO	23%
・ウクレレができるようになったことで、音楽を身近に感じるようになった	YES	81%	NO	19%
・ウクレレを弾き語りできるようになったことで、音楽の授業のイメージが変わった	YES	74%	NO	26%

VI 考察

1 事前事後アンケート結果の考察

1) ウクレレに関しての意識（事前アンケート）

生徒はウクレレを始める前からとても大きな興味を抱いていた。ここまでYESに高い数値が出たのは、シラバスにウクレレのことが明記されており、期待していた生徒が多いと思われる。だが、ウクレレは未知の部分が多く、弾くのは難しそうというイメージを持っていることが読み取れる。

2) ウクレレと、小・中学校で学んだりコーダーとの比較（事後アンケート）

この結果は注目すべきことではないだろうか。アンケートにあるように、ウクレレの演奏はリコーダーに比べて難しかったと答えた生徒が7割近くに及んだ。それにもかかわらず、9割の生徒がリコーダーに比べて楽しかったと回答している。

3) ウクレレの授業を終えて感じたこと (事後アンケート)

6割以上の生徒は難しかったと回答しているが、楽しかった、もっと弾いてみたい、音色が好きだ、他の曲にも挑戦してみたいと答えた生徒は9割を超え、生徒はウクレレに対して大きな愛情を抱いている。これは楽器を学ぶ上で非常に大切なことではないだろうか。

そして、この論文を執筆した最大の理由でもある、ウクレレを他の学校の高校生にもやらせてあげたいという項目では、YES 93%という非常に高い結果が出た。指導者としてはこれ以上ない嬉しい結果である。

4) ウクレレに似た特徴を持つ、ギター、ベースについて (事前アンケート)

ギター、ベースには、昨今のJ-POP、ロックの人気もあり約6割の生徒が興味を示した。やはりこのような楽器への興味の高さが読み取れる。ギター、ベースの経験者に聞くと7割の生徒が演奏するのは難しいと答えた。

5) ギター、ベース経験者のウクレレとの比較

この質問は、ギター、ベースの経験者の視点からウクレレについて聞いてみたくて、調査したものである。経験者の8割は楽器を習う初心者におすすめできると回答し、ほとんど全員が、ギター、ベースに比べて演奏が容易であったと答えている。それは弦の本数、サイズ、コードを押さえる容易さなども大きく影響しているだろう。彼らはウクレレなら大丈夫と太鼓判を押してくれたのだ。

筆者が予想していなかったのは、アンケートの自由記述欄に、ウクレレを学んで自信がつき、ギターに挑戦することができたと書いた生徒が何人もいたことだ。以前に教えた生徒からも「最近ギターを始めました。前からやりたいと思っていたのですが、先生のウクレレの授業が大きなきっかけとなりました。頑張ります」という嬉しい連絡ももらった。ウクレレ自体に素晴らしい楽器としての可能性が秘められていると思うが、ウクレレを学ぶことによって自信がつき、他の楽器を始めるきっかけになったというのは、大変喜ばしいことではないだろうか。

6) ウクレレを学んだことで変化したこと (事後アンケート)

ウクレレを演奏することにより、歌唱も自然に引き出されたと感じた生徒は8割近くにも上り、多くの生徒が、ウクレレを演奏できるようになったことで音楽を身近に感じ、音楽の授業のイメージが変わったと答えている。器楽としての演奏だけでなく、歌も伴って学べるというのはウクレレの大きな強みである。

2 先行事例と今回の実践の比較

今回の実践と先行事例で最も重要なドーンウクレレプログラムを比較する。最も大きな違いは、メロディやスケール（ハ長調やヘ長調などのスケールに加え、クロマティックスケールやペンタトニックスケールもある）など、一つ一つの音をウクレレで奏でることである。今回の実践では、残念ながら行うことができなかったが、メロディやスケールを演奏することにより、ウクレレの多様な表現、調性感を学ぶことができる。各調のスケールは、音楽の授業で意外と取り上げる機会が少ないのではないだろうか。ドーンウクレレプログラムでは、スケールの音を用いたメロディに音名を書かせ、演奏するというプログラムもある。筆者はこのウクレレの授業の後、作曲の授業を行ったのだが、ウクレレでコードについて学んでいたことは、大いに役立った。曲作りにウクレレを使用している生徒も

多く見られた。これらから総合して考えても、ウクレレを用いた音楽理論の学習には大きな可能性がある。また、ウクレレでメロディを奏でることができれば、生徒の喜びは大きく増すだろう。2台のウクレレでのアンサンブルなど楽器としての可能性も広がる。

ウクレレの弾き語りでは共通することも多かった。音楽教育現場において、ピアノを弾ける生徒以外は、楽器を演奏しながら歌うという機会はほぼないと言ってもよい。その意味でもウクレレの弾き語りは生徒にとって貴重な経験となった。ドーンウクレレプログラムでは、欠くことのできない大事なコードとして次の11個をあげている。Am、B \flat 、C、C 7 、D 7 、Dm、Em、F、F 7 、G、G 7 である。筆者はそのうちの最も基本的なコードC、Am、F、G 7 の4つに絞り、あとは「空も飛べるはず」で出てきた新しいコードで、随時学ばせるという形をとった。生徒はこの曲を演奏できるようになりたいという気持ちから、難しいと思われるコードであっても、果敢に挑戦し、克服していた。そして、私が最も重要だと思った共通点は、生徒が音に対してよく耳を澄ますようになったという点である。生徒は弾き方によって音色の違いが出ることを体感していたし、耳を澄まして音を聴くという習慣ができた。一人ひとり別室で試験をした時に、「自分の音がよく聴こえて気持ちよい。」という感想を持った生徒が多く見られた。とても大きな成果と言える。

生徒は、今まで学んできた小学校、中学校の課程、環境により、高校生の音楽能力、音楽理論の理解度には大きな差が見られるが、これらを全て包み込んでくれる器の大きさがウクレレにはある。ウクレレを手にした生徒は、楽器を演奏する喜びを知り、自分の音色に耳を澄ますなど、今までにない音楽体験をした。筆者がドーンウクレレプログラムやJHUIをよく学び、年間を通じたウクレレ指導で生徒に幅広い音楽体験をさせてあげれば、生徒の歌う力をさらに伸ばし、メロディ、スケール、コードの理論、スコアリーディングを学べ、耳を育て、日本の音楽教育をより豊かにすることができると思っている。ウクレレの持つ潜在能力は、高校生だけにとどまらず、小学生、中学生、保育者養成校の学生など様々な世代から、今後益々注目されていくだろう。

Ⅶ 終わりに

本論文では、授業実践と事前事後アンケートを通して、ウクレレの教育楽器としての可能性を探ってきた。事前アンケートでは約9割の生徒が難しそうと回答したが、一連の授業を終えて、楽しかった、もっと弾いてみたい、音色が好きだ、他の曲にも挑戦してみたい、と答えた生徒は9割を超えた。また、この論文を執筆した最大の理由でもある、ウクレレを他の学校の高校生にもやらせてあげたいという項目では、YES 93%という非常に高い結果が出た。筆者はウクレレを用いた音楽の授業に大きな可能性を感じている。これからもウクレレの研究を進め、生徒がウクレレを通じて、もっと音楽を身近に感じ、楽器の魅力を体感し、生涯音楽を愛する心を育てていけるよう取り組んでいきたい。

注

- 1) 坂口 匠「器楽の指導について—ギターを導入してみても—」『研究紀要』第26号、金沢大学教育学部附属中学校、1981年、pp. 41-49

坂口(1981)のギター指導の対象は中学生であるが、手の小さい生徒についての記述がある。「器楽にあてた12時間のうちリコーダーとギターにはそれぞれ半分づつあてました。特に1年生は身体が小さいせいでしょうが、初歩の段階の構え方や手の型にかなり時間がかかりました。指がとどきにくかったり手の型がうまくできなかつたりであまり先に進めず最終的には「4. 左手のおさえ方」までで曲をまったくで

きませんでした。」多くの高等学校の音楽の授業は1年間という限られた時間しかない。その中で、歌唱、器楽、創作を三つの軸として年間の授業を構成する。その中の器楽の時間を使って、曲を全く演奏できないのでは、生徒の充実度は低いまま、人生最後の音楽の授業を終えてしまうだろう。限られた器楽の時間の中で、いくつかの曲を修得することができ、生徒の今後の人生を豊かにしてくれるような魅力的な楽器はないものかと筆者は長い間模索してきた。

- 2) 21st Century Museum of Contemporary Art. Kanazawa 金沢21世紀美術館「Aloha Amigo! フェデリコ・エレロ×関口和之」
https://www.kanazawa21.jp/data_list.php?g=73&d=45 (2015年12月20日現在)
- 3) 飯塚朝子「子どもの歌唱における伴奏楽器について～ウクレレ伴奏の可能性～」、日本保育学会、第65回大会発表、2012年
- 4) 志民一成、中村かおり「幼児の声の技能を引き出す歌唱教材の開発 裏声の技能に着目して」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第41号、2010年、pp. 193-209
- 5) 東京都台東区立松葉小学校HP
<http://www.taitocity.net/matuba-s/matubakko.htm> (2015年12月20日現在)
- 6) ハッピー★ホッピー りかの歌うブログ <http://blog.livedoor.jp/rikamusic428/archives/50955836.html>
(2015年12月20日現在)
- 7) James Hill ukulele initiative
<http://www.jhui.org/> (2016年1月23日現在)
- 8) Ukulele Yes!
<http://www.ukuleleyes.com/issues/vol7/no4/feature.htm>
<http://www.ukuleleyes.com/issues/vol7/no4/interview.htm>
<http://www.ukuleleyes.com/issues/vol8/no1/interview.htm>
(2015年12月20日現在)
- 9) Ukulele in the Classroom
https://www.ukuleleintheclassroom.com/resources_C6.htm
https://www.ukuleleintheclassroom.com/resources_D6.htm
(2015年12月20日現在)
- 10) 文部科学省「第2章 各科目 第1節 音楽 I」
『高等学校学習指導要領解説 芸術(音楽・美術・工芸・書道)編・音楽編・美術編』
教育出版、2010年、pp. 11-26
- 11) 野口雅史、佐藤雄紀「ウクレレによるコード伴奏法について—気楽に弾き歌いを楽しむ楽器としての可能性—」『第52回研究大会発表論文集』保育士養成協議会、2013年、pp. 530-531
- 12) 勝 誠二『DVD & CDでよくわかる! はじめてのウクレレ』リットーミュージック、2012年、pp. 96-97

参考文献

Singer りかの歌う生活ブログ

<http://ameblo.jp/rika-ukulele/entry-12095494695.htm> (2015年12月20日現在)

志民一成、石川眞佐江、中村かおり「幼児の声の技能を引き出す歌唱実践の試み 静岡大学教育学部附属幼稚園における実践の検討」『静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇)』第43号、2012年、pp. 223-234

James Hill (Canadian musician)

[https://en.wikipedia.org/wiki/James_Hill_\(Canadian_musician\)](https://en.wikipedia.org/wiki/James_Hill_(Canadian_musician)) (2016年1月23日現在)

James Hill/Home

<http://www.jameshillmusic.com/bio> (2016年1月23日現在)

ジェイク・シマブクロ『プレイ・ラウド・ウクレレ』[DVD] ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル、2004年

いちむらまさき『ウクレレ上達100の裏ワザ 知ってトクする効果的な練習法&ヒント集』リットーミュージック、2008年

キヨシ小林『ウクレレメソッド 各指のための効果的トレーニングブック (TAB 譜付スコア・模範演奏CD付) 演奏表現力がアップする究極の上達本』ドレミ出版社、2007年

大橋英比個『見やすく・使いやすい・すぐに役立つ パッと見てわかる ウクレレの弾き方 とっても簡単! なにはともあれ弾いてみよう!』中央アート出版社、2004年

KIWAYA HP

<http://www.kiwaya.com/english/html/csr.html> (2015年12月20日現在)

超絶ウクレレ弾きとクラシックチェロ奏者が恋に落ちたら

<http://spotlight-media.jp/article/158748869273175293> (2015年12月20日現在)

J. Chalmers Doane

https://en.wikipedia.org/wiki/J._Chalmers_Doane (2015年12月20日現在)

HITORICA CANADA

<http://www.thecanadianencyclopedia.ca/en/article/j-chalmers-doane-emc/> (2015年12月20日現在)

Warren Dobson

U for Ukulele: A New Classroom Method for Young Children A project in education submitted in partial fulfillment of the requirements for the Degree of Master of Education (Curriculum) Acadia University Spring Convocation、2003年